
天才少女は恋をする。

マカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天才少女は恋をする。

【Nコード】

N4739A

【作者名】

マカ

【あらすじ】

「恋をした」この一言で始まる恋物語は存在するのか！

こんな始まり方もある。

「恋をした」

「ハア!？」

私の発言に中学来の友人である渋谷京子は何故か声を上げた。そもそも「ハア!？」というのは驚きを意味する声なのではなからうか。そんなに驚くことだろうか……いや、そうかもしれない。私たちはこういった会話をしたことなど皆無だったのだから。

「あんた、それ意味わかって言ってるの？」

「当たり前だ。君は私のことを侮辱するのか」

「そういうわけじゃないけど、いままでだってあたしがそういった話題を振ってたのに、興味ないって一蹴してくれたじゃない」

「む……」

そう言われれば、そんなことがあったな。しかし事実だったのだ。それは仕方あるまい。

「ほら、見なさい」

私が黙ったのを答えと受け取ったのか勝ち誇ったようにない胸を張る京子。

「あんた、今なんか失礼なことを思わなかった？」

ジト目で睨み、正解を口に出す。

ふむ、相変わらず勘が働く女子だ。

「まあ、そのことは不問にしておいてほしい。それよりも相談にのってほしい」

「って、やっぱり思ってたのね、やっぱり胸ね、胸のことを思ったのね。つーか人の身体的特徴の悪口を言っというて、相談にのって欲しいって言うのは調子がよすぎるんじゃない？」

「待て、少し敏感になりすぎだ。それに私は君の胸が小さいと口に出した覚えはないぞ」

「言った、つーか今言った!」

しまった。今は失態だった。憤慨している相手に油を注いで余計に激昂してまうに決まっている。やはり、今の私に冷静な判断力がないのか。

「いいですよー、あなたはDカップもある上に細身だもんねー、女らしいですよー」

まずい、どんどん京子が卑屈になり始めている。確かに私と京子を比べれば私のほうが女らしい体つきだと断言できる自信があるが……そうだ。

「何を言う、君のほうが断然女らしいではないか。料理も出来れば裁縫も完璧だ。君のような女性に男性は惹かれるのだろう？」

「やつぱり、そう思う？」

暗黒面に落ちかけていた京子は私の一言で笑みに変わる。こういうのを鶴の一声というのだな。うむ、勉強になった。

「ああ、もちろんだ。京子、君は実に女らしい」

「やつぱり？」

照れ隠しなのか、身体を左右に振っている京子の疑問とも思っていない疑問に頷いて答える。すると嬉しそうに奇声をあげた。

……む、なにかその反応を見ていると腹が立ってくる、しかし今の京子に水をさすような真似をすれば確実に機嫌を損ねる。拳句、相談などに乗ることなく私を置いて下校するだろう、こいつは。それは私にとって得策ではない。

何せ以前京子は、

「あたし程、男に尽くせる女はいない」

と、断言している。実際はどうなのかはわからないが、少なくとも私よりは経験があるのだろう。

「うむ、そこで相談なのだが」

「しょうがないわね。のってあげるわよ」

もはや先刻の卑屈モードはどこ吹く風、ご機嫌と言うように笑顔だ。

「恋というものをした場合はどうすればいいのだ？」

「うーん、そりゃあ色々あるけど。そもそも、あんた誰に惚れたの？」

「む……」

質問に質問で返すのはあまり感心ができないが、こちらは教えられる身だ。返さない訳にはいかないが、いざ言つとなると恥ずかしい。

「なあに、乙女ちつくに顔を赤くしてんのよ」

やはり、私の顔は赤いのか。それに動悸が普段より早い気がする。

「で、誰なのよ」

一度、自身を落ち着けるように深く息を吸って、口をどうにか開く。

「あ、朝倉湊だ」

こんな始まり方もある。(後書き)

乙女ちっくって死語ですか？

ケガの功名もある。

とても綺麗だった

「いったあ」

なにもないはずの廊下で転ぶなんて。少し、ぼーっとしすぎだ。こんなところを雅人が見ていたら怒鳴られてたところだ。うん、よかったあ、雅人が部活に行っていて。

高校二年になってこれじゃあね。

少し、自分の未来を悲観していると右腕が妙に痛いのに気付いた。「うっわあ、ひどい」

擦りむけて血が出ていた。そんなには出てはないけど、こういうのは血の量とか関係なしに痛い。

どうしようか、まだ部活はやってるし、保健室にいけば人はいるだろう。

「まったく、京子め。友人を置いていくとはなんて奴だ」

と、保健室に足を運ぼうとしたら向かいには背中の中半ばまで伸びた黒絹のような髪、長い前髪を抑えるようにヘアピンで止め、端正な顔立ちを覗かすのは学校一の秀才にして美人と誉れ高いクラスメイトが不機嫌そうに何かを呟いている。

学年一の天才も独り言を言うんだ。なんか親近感が湧いてくるなあ。

「待て、朝倉湊」

そんなことを思いながら、通り過ぎようとしたら、呼び止められた。

はて、僕は彼女に何かしただろうか。同じクラスにいれどあまり話す方ではないし。もしかしたら、彼女は読心術を使えるのでは？天才だし。

「君はどこに向かう気だ？」

僕の右腕を見ながらそう聞いてきた。

「どこって、保健室ですけど」

同じ年のはずなのだけど、つい彼女の話し方が偉そうだったから敬語が出てしまった。

やはりと呟いてから深く息を吐き出した。

「君は聞いてなかったのだな」

「え？ なにを」

「今朝、担当教員が言っていただろう、養護教員が今日はいないから怪我をするなと」

「あっ」

そういえば、そんなことを言っていたかもしれない。だとしたら、どうしようか。保健室の鍵が開いていない可能性は高い。しょうがない、帰ってから消毒しよう。

「仕方あるまい、朝倉湊、ちょっと来い」

「えっ？」

昇降口に向かおうと踵を返そうとしたら不意に左手を掴まれ、僕を引っ張りながら保健室の方に歩き出した。

「どこへいくんですか？」

「保健室だ」

当たり前だろうと、そうキツパリと言い放った。

「でも、鍵が開いてないんじゃない」

「なんとかするさ」

そんな自信たっぷりに言われてもなあ。

そうこうしている内に保健室の前に着いた。途中、放課後とはいえ校内にいた少ない生徒たちに奇異な目で見られていた気もするけど、まあいつか。

「む」

案の定、鍵は開いていなかった。

「どうするんですか？」

「任せておけ」

そう言って、前髪に手を当ててヘアピンを外した。すると、なんの抑えも無くなった黒髪は顔を隠すように垂れる。

けれど、彼女は気にした風もなくドアノブと視線を合わすように屈み、ヘアピンを伸ばして、鍵穴に突っ込ませ、何度も抜き差しして、ヘアピンの形を変えていく。

って、まさかこの人ピッキングやってる？

ニヤリと不適な笑顔を浮かべるとカチリという音が誰もいない廊下に響いて聞こえた。

「所詮、三十年前の鍵か」

つまらなそうに聞き逃せない一言を口に出した。

つまり、彼女はピッキングは当たり前という思考を持っていて、しかも普段からこういうことをやっているという意味なのだろう。

「ま、待て、勘違いするなよ、朝倉湊。私は普段からこういうことをしているわけじゃない。こういう時の為に身につけたのだ」

僕の視線の意味がわかったのか、慌てたように弁明する。珍しい、いつもクールなイメージを保有している彼女がうるたえるとは以外だ。

「ああ、もういい。とにかく入るぞ」

見る目の意味が変わったのに気づかず、ごまかすように保健室に入っていく。当然、僕もそれに倣って保健室に足を踏み入れた。

夕日がカーテンの隙間から差し込み、誰もいない保健室を僅かに照らしている。

「む、少し暗いな」

シャッとカーテンを開けると二人しかいない部屋が赤く染め上げられた。

「うわぁ」

この光景はすごく幻想的だった。夕日に映える黒髪を持った少女。それはどこまでも綺麗で輝いているように見えた。

「何をしているんだ？ さっさと怪我したところを洗ってここに座

れ

声の主はもうすでにパイプイスを用意し座っている。

は、早いなあ、さっきまで立っていたと思ったら。

とりあえず彼女の言うとおり保健室の隅にある蛇口で腕を洗って、用意してくれたイスに座る。

「ふむ、あまり血は出ていないようだな」

そういつて、消毒もせずに包帯を巻きつけてくる。

「あ、あの消毒は？」

「そんなものは必要ない」

反論は聞かないというように断言してくれた。

「傷口を洗い、清潔なガーゼ、もしくは包帯でも巻いておけば勝手に治る。下手に消毒すれば治るのが遅くなる。そもそも人間にはある程度の治癒能力が備わっているんだ。余程ひどいものでなければ、消毒液や薬に頼る必要などない」

講義のようにすらすらと紡ぐ言葉に対して、包帯を巻く手は苦手なのかもたついていた。

うーん、ピッキング技術を持っていた割りに案外不器用？

「お、終わったぞ」

僕の腕に巻かれた包帯はがたがたな結果だった。

「わ、悪いな。私ではこれが限界なんだ。帰ってから家の人間に巻き直してもらえ」

その結果を見てどうやら落ち込んでいるようだ。その反応が不謹慎にも可愛く見えた。

「ううん、ありがとう」

出来ないものであれ、僕の為にしてくれたのだ。感謝しないわけがないし、嬉しかった。

「そうか、感謝してもらえるほど出来たものではなかったのだが、どういたしまして」

あっ

そう目の前にいる普段大人びている少女が嬉しそうに笑った。そ

の笑顔はどこまでも綺麗で夕日と一緒に輝いて見え、いつまでも見惚れていたかった。

『お願い』

「どうもー、初めましての方は初めまして、そうでない方はこんにちはわ。『天才少女は恋をする』の作者です」

「今作の主人公だ」

「あー、女の子なんだから腕組みながらそういう言葉遣いやめませんか？ 読者の皆さまに男って思われますよ」

「ふん、こんな話に読者がいるのか？」

「あー、今、鼻で笑った。というか、読者がいないと困るのは君ですよ」

「どづいっことだ」

「そのままの意味です。だって、まだ君の名前決まっていなくて読者の皆さまに考えてもらおう気満々ですよ」

「待て、貴様。それは本気か？」

「いえす、『やる気はないけど本気』と書いてマジと読むくらい本気」

「そうか、地獄が見たかったのか、貴様は」

「ぎゃあああ！ やめてー。本作にはない力を顕現させて、アイアンクローをかますのをやめてー。そもそも君は女の子なんだから」

「安心しろ、ここは別時空だ。並行世界の一つだ。それにどこかのあかい義妹とてやっっているではないか」

「ああ、あれは確かに驚いた。原作をやらずに、格ゲーのほうに走って見たら、投げコマンドでアイアンクローやっけて心臓が止まりかけましたよ？ ぬああああ！ やめでー、顔がゆがむー」

「あまり関係ないことは話さないほうがいい、さっさと本題にいけ」
「あああああ！ わがっだ。わがりまじだから、や、やめでえええ」

「ふん、軟弱な人間だ」

「りんごを片手で握りつぶせる力を顕現している方が、それを言われるのはどうかなあ」

「何か言ったか」

「わ、わかってますよ。さて、えー、一応皆さまにある程度ご理解いただけたと思いますが、今作の主人公の名前を考えていただきました。本作を読んで「主人公は誰やねん」と思われた方は第一話の冒頭にて「恋をした」と発言した女の子だと思ってください」

「なお、名前に関しては注意事項がある『みねしま』、『ゆう』と言った名字、名前は付けないでいただきたい。わかる方は放つといてくれればいい、わからない方は闇に葬ってくれ。これは作者の精神衛生上、もしくは著作権法に引っかかるとまずいので、ここだけ気にしておいてくれ」

「名前を思いついた場合はW0264Aにメッセージを送っていただくか、秘密基地の小説ヒントにスレッドを作っておくのでそこにレスをお願いします。万が一、複数応募していただいた場合は勝手に

ながら作者の判断で決めさせていただきます」

「それでは、これからの今作の運命を君たちに任せる」

「それでは今日はここまで。読んでいただき、ありがとございまして」

てんてけてんてん（閉幕）

「いやー、緊張したね」

「そうだな」

「あれ？ その手に握る人を簡単に入れられそうで、尚且つ破れにくそうな白い袋は？」

「貴様の思うとおりだ」

「え？ あ！ うそ、まさか人肉サンドバッグ？ 執行者でもないのにそういうことが出来るわけ……」

「だから、言っているであろう。ここは別の世界だと、ここで貴様を袋詰めにしたところで本作には何の影響は出ない」

「ふごー、ふごー（訳）な、なんで私がこんな目に！」

「決まっているだろう、私の名前も決まっすらいないのに連載を始め、拳句『天才少女は恋をする』という、ふざけたタイトルをつけたくせに、作者に知識などないと、きた。極刑に処されても文句は言えんだろう？」

「ふぎゃー、ふぎいー（訳）ごめんなさい、もうしないとはいえなけれど」

「もういい、話してくれるな。私は貴様に絶望しているのだから」

声なき悲鳴とともに白いサンドバッグは真っ赤に染まりましたと
な。

ちゃんちゃん（今度こそ終わり）

こんな相談もある。

「とまあ、西日に照らされた笑顔がな……」

「へー、つまり、相変わらず成長してなかったのね、包帯の巻き方」
朝倉湊との一件を聞いての感想はそれだった。

くっ、人の気にしていることを。そもそも、それを今言うのはおかしいだろう。

「こちらは今、弱者だ。私は怒鳴る気持ちに鎖に縛るようにして押さえつける。」

「しかし、あなたが惚れたのは皆のみなくんか。まあ、わからなくはないけど。あのキラースマイルは最強だしね」

確かに、あの笑顔は反則の域だった。声を失ったのはラッセルの絵を見たとき以来だ。いや、ラッセルの絵と比べていいものではない、あの皆の……

「待て、京子。なんだ、皆のみなくんとは」

「あれ、知らない？ 朝倉湊の愛称みたいなものよ」

「あ、愛称だと」

「うん、彼のファンクラブたちのね。あの高校二年生とは思えないミニマムさ、女装させたら楽しそうな男子No.1なベビーフェイス。因みに朝倉湊に境界はないとまで言われてるんだよね。ファン層は下級生から上級生まで、果てには教師までって噂もあるわ。ついでに言つと中学かららしいよ」

「う、この学校は阿呆ばかりか……いや、しかし、確かに朝倉湊は、

「おっやー、恋する乙女の顔してるねー。いやー、初めてみたかも」
どこぞの年を重ねスケベ根性を丸出した親父のような目で見られている気がするのだが。知らぬ間に老けたのか、こいつは。

「また失礼なことを考えてたわね。まあ、いいけど。胸のことじゃないみたいだし」

後半のセリフは呟いているつもりのように丸聞こえだった。ふむ、やはり京子の勘は素晴らしいな。

「で、あんたはどうしたいの？」

「どうしたい、とは」

私の言葉に呆れたように深く息を吐き出す。何故だかその反応は腹立たせてくれる。

「そのままよ。見ていただけでいいのか、それとも仲良くなりたいたいのか」

見ているだけ、それだけで私はおかしくなってしまうそうだと云うのに……しかし、このままは、

「嫌だ」

出た声は自分で思っていたものより声は小さく掠れていた。

「へっ？ なに」

「絶対に嫌だ、と言ったんだ」

恥ずかしくすぎて、自分の頬が熱いことがわかってしまう。それを理解できてしまうことがさらに今の状況を増長させていく。くっ、こんなにも自身をコントロールできないのは久しぶりだ。

「ふーん、あんたをこんな顔にさせるなんて、みなくん羨ましいな」

「何か言ったか」

「いいえ。そんな事より明日、行動に移るわよ」

そういつて、私たちは放課後の学校をあとにした。

こんな相談もある。(後書き)

恋する乙女って死語ですか？

こんな昼もある。

吹き抜けるようにどこまでも青い空、穴を開けるように太陽が僕の真上にあつた。

もう五月の半ばで結構暑いというのに何故僕らは屋上でお昼を食べているんだろうか。

「なんでって、お前のためを思って俺は、俺は」

スポーツ刈りで褐色の肌、さらにはガタイがいい。一言で言うと体育会系の人である木田雅人は嘘泣きをしながら、箸の動きを止めていない。

演技をする気はないのだろうか、雅人は。いや、本気なのだろう。「そうだね、そのために事務員の人たちを脅して屋上の鍵を手に入れたんだよね」

僕の一言が気に入らなかったのか、嘘泣きをやめて勢いよくこちらを見てくる。

「何言ってる俺は脅したんじゃない、ただ事務員が事務室で乳繰り合ってる所を激写して、それを見せびらかせただけだ。それと、これは合鍵だ」

どうだ、と言わんばかりに踏ん返り返る雅人。けれど、僕が抱くのは感心ではなく呆れでしかないのに雅人は気づきていない。

予想以上に性質が悪かった。まさか、合鍵だとは。それに雅人の行動は間違いなく脅しだと思う。

「それは犯罪ではないのか、木田雅人」

「え？」

「はい？」

普段聞かない声、けれどつい先日聞いたばかりの声が僕の背後から掛かった。

「犯罪ではないのか、と聞いたのだが。違うのか？」

後ろにいた少女が小首を傾げると、長い黒髪もそちらへと流れる。

何故か左側の前髪が顔を隠すように垂れていた。

「美倉桔梗！ どうしてここに……ってどうやってここに入ったんだ」

雅人が驚くのも無理はないかな、確かに屋上の鍵は内側から閉めたはずである。開けられる人間がいるとすれば、事務員と教師くらいだ。生徒でここに入れるのは雅人くらいのはず……ではないかな。先日それを目撃したわけだし、その証拠に彼女の左側の前髪が垂れている。

「あたしもいるわよー」

声が出たところには美倉さんより頭一つほど高く、髪を茶に染め上げた渋谷さんが立っていた。

「私の名前はいつの間にか決まったんだ？」

「……」

ぼそりと作品の関係上言っただけなこと呟いているも誰も反応はしない、きっと事情を知っているんだろう。

「何を頷いているんだ？ 朝倉湊」

「な、なんでもないよ、それより美倉さんはどうしたの」

「む……」

なんとなく言った言葉だったのだけれど、美倉さんの頬が赤くなかった気がする。

「その、一緒に弁当を食べては……だめか？」

そういう彼女の手にはお弁当を持っていた。

その表情はいつも同じクラスにいる時の顔ではなかった。常に大人びた雰囲気を持っている様に見える美倉さんが今は年相応の顔をしている。

はつきり言って断りづらい。けど、雅人が自分の為に食事を出来るようここを提供してくれたのにそれを台無しにすることも出来ない、どうしようか。

「あ、大丈夫だよー、みなくん。皆には言わないから……っていうか、ここで頷かなきゃバラす」

顔は笑ってても声は本気、怖いなあこの光景を見るのは。見事な脅迫だよ渋谷さん。もしかしたら雅人と気が合うかもしれない。

仕方ないのでここは雅人の方に向いてみ……

「待て、バラすというのはどういうことだ」

「え？」

雅人と僕の声は意外な言葉で重なった。

知らない？ ならなんでこんなところに……

「いや……それはね」

「私はそんなこと聞いていないぞ」

非難を持った目の色に対し顔は引きつり後退を余儀なくされる渋谷さん。あの渋谷さんでも美倉さんには勝てないんだなあ。なんとなく感心。

「あ、あたしだって桔梗の為にね……」

反論しようと声を上げようとするも、すぐに自制をするように口に手を当てた。

美倉さんのため、とはどういうことなんだろう。

「そうだね、うん、あたしが悪かった。ごめんね、みなくん」

さつきとは雰囲気は変わり、茶色く染め上げた頭を僕に向かって下げた。

「え、あ、大丈夫。うん、じゃあ一緒に食べようか」

「湊！」

僕が出した言葉に、声を荒げて反応したのは雅人だった。

「ごめん、雅人。せつかく用意してくれたのに」

「いや、お前がいいんなら俺は何も言わないけど」

「うん、ありがと」

事情を知って僕の為にしてくれていた親友に感謝をして、改めて二人の来訪者を見る。

「けど、僕がここにいることを誰にも言わないでほしいんだ」

「構わないが理由を教えてください」

「うん。でも多分、渋谷さんは知ってるよね」

ばつが悪そうに頷き、口を開いた。

「ファンクラブでしょ」

「そう、自分で言うのもどうかと思うんだけど、僕にはファンクラブがいるんだ」

「どういうことだ？」

この中で唯一そのことを知らないクラスメート、それがとても嬉しく感じる。けれど同時に寂しかった。それは多分、美倉さんだからだと思う。

「つまりはうるさいんだよ、そのファンクラブが。湊のことを何も考えないで騒ぐんだ。それだと落ち着いて食えないから、ここにいるんだ」

吐き捨てるように呟く雅人。その行為はものすごく嬉しい。

「……そうだったのか」

納得したように頷き、晴れ晴れとした屋上に僅かな沈黙が混じる。やがて決心したように踵を返し、渋谷さんの腕を取る。

「京子、戻るぞ」

「え、ちよっ！ 桔梗？」

「美倉さん？」

「悪いことをした朝倉湊、木田雅人。私たちはこれで失礼する」

出口に向かう足には淀みはなく、ただ一心に進んでいる。渋谷さんがそれを留めるように声を荒げているが、それを聞く気はないのか歩みは止まらない。

「ああ、そうだ」

扉に手をかけてピタリと足を止め、思い出したように口を開く。

「約束は守る。その、代わりだな……」

さっきの歩みとは違い、後半の台詞にかなりの動揺が声に混じっている。

「約束してほしい」

「約束？」

「ああ、そのだな……断りたいなら断ってくれて構わないのだが、」

今までの話し方とはずいぶん違った。普段はきつぱりとした口調なのに、今はたどたどしく感じられる。

「よければ、今度から私と昼を食べてくれないか？」

以前の保健室のときと同じように頬を赤く染めている。いや、代わりと言つのはよくないな、と真剣な顔をして呟いている。

それがなんでかとてもおかしかった。

「む、何を笑っているんだ、京子、朝倉湊」

よくみれば渋谷さんもお腹を抱えている。それを恨めしげにじと目で睨む

「なんでもないよ。うん、じゃあ明日から一緒に食べよう」

「い、いいのか」

「大丈夫だよ。ね、雅人」

「あ、ああ」

「そうか、では明日」

そのままドアを開け、二人は屋上を出て行った。最後に律儀にも鍵が閉まる音が聞こえて、おかしかった。

「大丈夫なのか？」

心配するように顔を寄せてくる雅人。

本当にいい友達を持ったんだな、僕。そんな友人の不安を取り除くために僕は笑った。

「大丈夫だって、美倉さんはきつと」

あとがき

『決定』

「どうもー、最近ツンデレと言う名の萌を理解しかけている作者です」

「最早、変態の一途を辿るのみか、貴様は」

「何を頭を抑えてため息をついているのかなー」

「貴様のようなものが私を生み出したと考えると頭が痛くなるのは当然だろう」

「そんなに断言されると傷ついちゃうよ」

「傷どころで済ますものか」

「うーん、もの凄く怖い。けど、まあそれは置いて、やっと決定しましたあ」

「逃げるのか。まあ、こんな話をしているよりましか。私の為に最速で話せ」

「なんと私のバイトが決定しま……げび!？」

「な、何故に力カト落しを決めるの、別次元じゃなかったら死んでるよ?」

「黙れ黙れ黙れ、そんな無駄なことを話している人間は死ねばいい」

「うっ、作者（生みの親）に対してそんなことを言うなんて」

「黙れ、私たちがいなければ存在意義皆無な分際で作者（生みの親）だと、ふざけるな」

「うっ」

「泣くな。黙れ。本題に移れ。今回の世界ではアイアンクローは出来ないが力カト落しならいくらでもできるが」

「わ、わかったよう、やりますよう」

「いい年して半べそになるな」

「えー、では『第一回天才少女は恋をする。の主人公の名前決定戦』に決着がつかしました」

「本編にて既に知られていることだがな」

「『第一回』には突っ込まないんだね」

「貴様の寝言に付き合う気はないからな。それと貴様に任せると脱線した拳句に崖から落ちるのは目に見えているから、私が発表しよう」

「……まあ、いつか」

「私こと本作ヒロインである名前は……」

「名前は……」

「美倉桔梗に決定した」

「パンパカパーン。いやあよかったねほんと名前決まって。最初に考えてた段階だと最終話で判明する予定なのにここで発表できるなんて」

「まったくだ。私らしい名前をつけていただいて感謝してもしきれない」

「いや、もうほんとにねえ、愁真さまに感謝です」

「うむ、貴女には心から感謝する」

「ご協力頂いた、董さま、八方美人さま御二方にも限りない感謝を」

『ありがとうございました』（作者&桔梗）

「それでは、ここら辺で失礼します」

「そうだな、そろそろ皆も飽きてきたころだろう。ここらで失礼す

る」

てんでけてんてん（閉幕）

「いやあ、今回も緊張したねえ……ってなんで手にバットを持っているの？」

「安心しろ私は呪文など知らんから復活は望めない」

「って、それはエスカリボ……」

「それ以上言わせるか」

形状崩壊 一片滅砕 欠片無残 壊滅

作者は塵にもならず、破片も残ることなくその姿を失くしたとき。

ちゃんちゃん

こんな話をしたっていいじゃないか。

「まーたつく、せつかく私がお膳立てしてあげようと思ったのに放課後の教室で京子はふてくされるようにイスに座っている。」

「む……悪かったな。しかし、あれは京子が悪いだろう。」

「そうだけどさー」

机に突っ伏し、腕を伸ばす京子の声はやはり不機嫌、

「でっもー」

かと思えば、にやりと口の端をゆがめてこちらを見てきた。

「意外にやるわね、桔梗。まさか昼食の約束を取り付けるなんて」

「……む」

その一言で、僅かに頬が熱くなった気がした。しかし、京子はそれを突いてこずに口を開く。気のせいだろうか。

「それで、どうするのー？」

にやにやと薄笑いを浮かべながら弾んだ声をこちらに向けてくる。

……待て、こいつは、

「みなくんの『為』にお弁当作るのー？」

「っ！」

今の一言で、先刻の非でないほどに火がでるほど熱くなった。

そうか、そういうことか。何故、先程突っ込んでかなかったのか、考えればわかることだった。私をさらに追い詰めるためか。

「くっふー、なあに、顔を赤らめているのかなー」

油断していた。ある程度は予想できたはずだというのに。

「愛情たっぷりのお弁当は作らないのかなー」

くっ、恥ずかしい単語を並べおつてからに。だが、京子には悪いが君の思うような事はありえない。

「残念ながらそれは不可能だ」

「へっ？ どういうこと？」

「忘れたのか、君は。私の料理の腕を」

「っ!？」

私の的確な言葉でへたり込む京子。……む、なんだか自分で言っていて虚しい。

「その反応は思い出したようだな」

「……そうだった。あの貴文さんにくら教えられても成長しないほどの、食材を生ごみどころか劇薬物に変えてしまうほどの……」

「その言い分は非常に腹が立つのだが」

へたり込みながら、悔やみながらだす声は、私をますます不快にしてくれる。が、それは決して否定できないので、何も言えない自分を腹立たしく思う。しかし、仕方がないことなのだ。

どうにか理性で怒りを押し込め昼に見た光景を思い出す。

「それにだ。朝倉湊と木田雅人が困んでいた弁当箱を見ていたか?」
思い出そうと頭を抑え、目を細める京子。

「……」

三分ほど経ったものの、京子の口は開かずにはじけているだけだ。興味がない、ないし気にしてなければ記憶しないのだったなこいつは。

「重箱だったのだ。しかも、三段だ」

私の発言に口を開きっぱなしにする京子。当然か、私とて学校で重箱を持ってくる奴なぞ見たことがない。

「おそらく、木田雅人と二人で分けて食べているのだろうな、そんな中に弁当を作ってきてても迷惑なだけだと思わないか?」

「うっ、確かに。……でも、その仮定は弁当を作れるようになってから言うべきだと思うのだけど」

「ぐっ」

きょ、京子にしては鋭いことを言ってくれる。……今さら貴文や京子に教わるのも癪だ。これから料理の本でも買ってくれようか。

料理が作れたら　そんな望みを持ちつつ学校を後にすることに
した。

こんな昼の過ごし方があったっていいじゃないか。

「みなくんって意外につまらないんだね」
「なんで、そんなことを言うんだらう。ならなんで僕と付き合ったの？」

「決まってるじゃん、みなくんが人気者だったからだよ。皆に羨ましがられたかったし。じゃなきゃ付き合う意味なんてないしね」
「僕が人気者じゃなかったら価値がないの？」

「そうじゃないつもりだったけど」
「じゃあ、なんで別れるなんていうの？」

「だって、みなくんつまらないんだもん」

つまらないつまらないつまらないつまらないつまらないつまらない
いつまらないつまらないつまらないつまらないつまらないつまらない。

僕はつまらないんだらうか……

「あつ」

カーテンの隙間から僅かな光がもれているのが見えた。

「夢……？」

その事実を確認するために部屋を見渡す。淡いブルーのカーテンには光で映えて見える。正面には本棚になりかけている机があった。その横にはあまり電源を点けることのないテレビが置いてある。

数分経って、ようやくここが自分の部屋で、さっき見ていたのが夢だと把握できた。安堵の息が思わずもれた。未だに忘れられないことを未練がましく思いながら。

「でも、やっぱり忘れられないよね」

自然と口から零れた言葉に苦笑してしまう。忘れたいんだけどな

あ。ま、時間に任せるしかないよねえ。

ため息を一つ吐いて、時計に目線を持っていくと五時半十分前を指しているのが見えた。

もうこんな時間かあ。早く作らないと朝ごはんの時間が取れなくなる。

取り合えずベッドから降り、寝巻きからワイシャツと学生ズボンに着替える。上着を片手に居間へ入る。居間の奥に台所があるので通り過ぎる際に居間に上着を置いてから、台所に入る。

「さて、何から作ろう」

ご飯は昨日のうちに研いで予約設定しておいたから、今はホカホカだ。まあ、定番の玉子焼きでも作ろう、あとは肉そぼろでもご飯にのせようか。あれはそれなりに好評だったし。あと鮭はあったかな、あれば照り焼きにして……あった、あった。

あとは昨日中に準備しておいた豚肉を生姜焼きにして……少し脂っこいかな、サラダも適当に入れておこう……サラダじゃなくお新香にしよう。少し、多めに作っておいた方がいいかな、美倉さんたちも来るみたいだし。でも自分たちで持つてくる可能性も高いし……一段増やして四段にしておこう。それくらいなら雅人が食べてくれるだろうし。

ある程度の献立の目算をたてたので調理に入るためまな板と包丁を取り出し取り掛かった。

「何？ これはすべて君が作ったと言うのか」

晴天の下にある屋上で生姜焼きを口にしながら驚愕したのは美倉さんだった。

「むむ、これは貴文さんに匹敵しそうだわ」

玉子焼きを咀嚼しながら呟くは渋谷さん。

「一応ね、両親共働きだからせざるを得なかったんだよ」

「む、そうか。……しかし、これでは私の立つ瀬が……」

囁くような呟きは後半が「ご」によと小さくなり聞き取れなかった。

「えっと、美倉さん。口に合わなかった？」

「む、いや、そんな事はない。だがしかし、これでは……いや、いい気にするな。君の作った弁当は実に美味だ」

「よかった」

うん、やっぱり美味しいって言ってもらえると嬉しいな。それにしても、なんで美倉さんは今日弁当がなかったんだろうか。昨日は持ってきてたのに。渋谷さんは僕の弁当に興味があつたみたいで、自分の弁当は後で食べるといつて僕の弁当を吟味し始め玉子焼きに手をつけていた。まあ、いいかな多めに作ってきたわけだし、正解だったというこで。

「相変わらず旨くて、こっちは大助かりだ」

雅人も満足してくれているみたいだし良かった、良かった。

「あ、あのだな朝倉湊、まだ食べても大丈夫か？」

「……」

なんとというか、恐る恐る聞いてくる美倉さんの顔は、まるでお菓子を欲しがるような子供みたいだった。はっきり言って可愛い。なんていうかギャップを感じるなあ。

「だめか？」

「ううん、そんな事ないよ多目に作ってきたからどんどん食べて」

「ほんとか!」

目を輝かせ広げられた重箱に箸を向けた美倉さん。不意に絆創膏だらけの左手が目に入った。

昨日はなかったような気がするんだけど、どうしたんだろう？

「む、どうした朝倉湊」

幸せそうに玉子焼きを口にしていると僕が見ていることに気づいたのか、ごくりと玉子焼きを飲み込んでこちらに目を合わせてきた。「え、その左手はどうしたのになって」

「……っ!」

そう指差すと箸を高速で置いて、その開いた右手で左手を隠した。
「な、なんでもないぞ、これは」

そういう本人の顔は何故か真っ赤だ。あと美倉さんの後ろでは渋谷さんが笑いを抑えるように肩を震わせている。その二人を雅人は傍観する。

何なのだろう。

「と、とにかく、なんでもないんだ。だから、気にしないでく……」
そう言っただけで箸を再開する為に箸を取ろうとするも、その動きは動揺したままなので当たり前前といえば当たり前前なのだけど、箸を落とした。

「あつ」

落としてしまった箸と弁当箱に視線を右往左往させ、何秒か経つと諦めたように、残念そうにため息を吐き手を合わせた。

「ごちそうさまだ、朝倉湊」

「え、あ、大丈夫だよ。予備の箸があるから」

「む、いやしかし」

一度言ってしまった言葉を戻すのに抵抗があるのか差し出した箸を取る様子はない。

「ん、でも今日は少し作りすぎちゃったから、処理するのを手伝ってくれとありがたいただけ」

「む……わかった」

そう言っただけで箸を受け取ってくれた。まあ、作りすぎたのは事実だし。

「ありがとう、朝倉湊」

そうぼそりと呟いて昼食を再再開した。

「美倉って、教室でいるときとキャラ違うな」

そう生姜焼きを口にしながら雅人はそう口にした。食べながら喋るのはどうかと思う。

「そうか？」

そんな会話をしながら昼休みが終わった。

あとがき（ここに書かれているのはフィクションです。実際に起こった話ではないです）

「どもー、全世界百億人のツンデレファンの皆さまお待たせしましたー。毎度お馴染みの作者です」

「貴様、あほだろ」

「登場していきなりその発言はどうだろう」

「あほにあほと言って何が悪い、この世界に百億もの人口はないだろっ」

「はっはーはっーん、それは心配に及ばず、この右手にあるもので万事解決」

「なんだその剣みたいなのは」

「これは宝石剣という平行世界を歩き渡れる奇跡のアイテムなわけですよ」

「それが？」

「それでね、この剣で幾千の私に会ってきた訳ですよ。そこで彼らにこの日にこの話を更新するよう頼んだわけです。おかげで更新が遅れたけど。つまり、全世界というのは私が歩き回った世界も含まれるのだよ、でまあ千くらい渡ってきたしこれくらい見ているだろうと言った次第です……ってあつれー？ なにをもっているのかなー？ それ私と持っている奴と同じだよ」

「ああ、気にするな、レプリカだこれは」

「それで、何を、する気、なんですか？」

「決まっているだろう、あほな作者に粛清を与えるんだ」

「そんなさらって言わなくても、っていつか死刑ですか！」

「安心しろ消し炭も残らんようにしておいてやる」

「あ、安心できねえー！」

「Eine ,Zwei ,Randverschwinden (接続、解放、大斬撃)」

閉幕などなく、作者は塵にもなれませんでしたとさ(ちゃんちゃん)

こんな放課後もある。

「しかし、計算外だった」

「そうねー、確かに予想外だったわね」

お馴染みとなりかけている夕暮れの教室にて、私と京子は向かい合って座っている。

「まさか、朝倉湊は料理が上手かったとは……」

「まさか、お弁当作るうとしたとは……」

吐いたのは同時、されど言葉の意味はまったくもって違った。

「ん？」

「あっ」

京子の出した言葉に口を押さえ、私は眉を顰め不満を表し、そのまま睨む。

「どういう意味だ、京子」

「んー、そのままかな」

が、京子はそれを流すように言葉を紡いだ。

「そのままだと」

「だから、そのままだって」

荒げる私の声とは正反対に冷静な色を持った声で返す京子。

「自分で料理が苦手だって理解しているくせに、なーんで、いきなりお弁当なんて、多少高レベルなものを作ろうとするかな」

「うっ」

京子の台詞は間違いなく正論だ。しかし、仕方ないではないか、思いついてしまったのだから。

「あんたは、頭がいいんだからもちっと考えてからにしないで。そもそも料理って見るだけだと簡単に見えるけど、結構大変なのよ。それは身をもって理解しているつもりなのだが。」

「私だって、貴文さんに教えてもらってやっとこさ今のレベルなのよ。あんたはまず、玉子焼き……いや、目玉焼きができるようになる」

つてからにしないで」

私だつて目玉焼きくらいは……いや、過去を振り返るのは良くないな。人間、前を向いて歩かなければ。

「失敗は振り返るべきだと思うけど」

「何故、私の考えていたことがわかる」

「わかるわよ、料理に関しては特に」

自信满满にない胸を張りながら京子は言う。というか、そんなことを誇るな。

「今、精一杯の皮肉を思い浮かべなかった？ 胸のことか」

相変わらずなのだ、胸のことにしては。

「きーきょーうー？」

何故だか京子の声が、暗黒面に落ちかかっている気がしたので、とりあえず否定することにする。

「いや、なにも思い浮かべてはいない」

じとりと私の言葉を信じてたまるかと言うように睨んでくる。しかし、思い浮かべてはいない、自然に出てしまったのだから仕方あるまい。そうだ、私は無実だ。

「なに、自己完結したように頷いてるのよ」

「いや、気にするな。それより私はこれからどうすべきだと思う？」

とりあえず、このままにしておくと話があらぬ方向へ行ってしまうそうなので、無理矢理会話の軌道をずらすことにした。

「いきなり話を変えて……まあ、いいか」

元に戻そうとしても無駄だと悟ったのか、ため息を吐いて頭を左右に振った。

「どうするか……ねえ、なんかもういつぞ、こくれば？」

「……？」

「どづい意味だ？」

『こくれば』『こくる』の仮定形になるのか？ いやそもそも『こくる』というのは告白するの略から生まれたもの、それを動詞とするのはどづい……！ ちょっと待って告白だ。

頬が熱くなるのと同時に、思考するのを中断し、京子の顔を見ればにやにやと笑っていた。

くっ、またか。どうも私はこの手の話題には弱いようだ。

「と、いうのは冗談よ、冗談」

そう言ったとおり、京子の唇は震え、目はどう見ても笑っている。自分がいじられていたと気づけばいくら私でも、怒りを感じ得ないはずが無い。

「きょうじ……」

「ちよ、な、なに怒ってんのよ」

「ふ、ふふふ」

「うわっ！ こわっ！ っていうかキャラちがっ！ ごめんほんとに私が悪かった。謝るから」

今にも土下座しそうな勢いで頭を下げつつ後退している。むう、冗談のつもりだったのだが、しかしここまでの反応をされるとは。

「これで勘弁して」

京子が私の目の前に差し出したのは、四枚の映画のチケットだった。

あとがき（+おしらせ）

「どうもー、ここ最近死に掛けている作者です」

「死ね」

「……あのー、さすがに人に対してそんな風に言つとほんとに死んじやう気がしてならんっていうか、死にたくなるって言つか」

「まあ、冗談はおいといてだ」

「冗談だったんだ。あのタイミングには限りない悪意を持って言っていた気がした……」

「何故、私たちがここにいるのだ。今までのパターンで見ると次の話で書かれるはずではないのか」

「うっわあ、完璧無視ですか。まあ、いいや。それに関しては理由が二つあります。ひとつは……」

「作者がへたれだからか」

「うわあ、そんなため息混じりに言われたら落ち込むって、否定しないけど。まあそのとおりです。ここ最近バイトやら受験やらで次の話がいつになるか解らるのでそのお知らせの為に、ここで書いているわけです」

「もう一つはなんだ？」

「それは次回からシリアスちっくなお話になるので、雰囲気ぶち壊しなあとがきは最終話までしばしのお別れです」

「誰もこのあとがきを読んでもとは思えんが」

「……とまあ、そんな訳です。それではそろそろ時間なので、あでゆー」

「ほう、私を無視するというのか」

「ちょ、ちょっと待って、なにそのでこぼこな金属バットは」

「属性情報をブースト変更した特製バットだ」

「え、それって……まさか、『原作未読者に優しくないアニメ』で検索するとヒットするアニメに出てくる元眼鏡属性な女の子と知り合いなんですか？」

「貴様にそれを教える義務はないだろう？　だが、そつだな運がよければ会えるかもしれんな、宇宙で」

「パトロンには会いたくな……ぎおひゃ！」

作者めでたく星になったとさ。

「じつじつ風に遊びたい時だつてある。

「……むう」

初夏らしく淡い色の青のカーディガン、その下に白いシャツ、シヤツと同色のロングスカートを身に付け、黒絹を思わせるような綺麗な黒髪に、スラリとした体躯、すっきりとはっきりとした端正な顔立ちの美女である美倉さんは、今や恐怖と困惑で眉をひそめ唸っていた。

「えつと、大丈夫？」

「だ、大丈夫だ。私に怖いものなどない」

赤と黒がやたら塗りたくられている看板から、勢いよく目を離しをこちらを向く。額に脂汗が浮かんでいるように見えた。

「えつと、じゃあ入るけどいいかな」

「あ、ああ」

若干と言うか、かなり怯えつつ頷くのを見て、本当にいいのかも思ったけど、本人が良いと言うのだから大丈夫なだろう。とりあえず後ろでお腹を抱えつつ笑い声を噛み殺している渋谷さんと雅人にも、一応確認をとってから目の前にある映画館へ四人全員で入ることにした。

「映画を見に行かないか？」

あれから恒例となつて雨の日以外は屋上で、四人で昼食を食べる事になつて早三週間ほど経ち、中間テストも先日終わつて、期末があるなーと思いつつ、昼食を終え少しぼーっとしていたら美倉さんがそう提案した。

「映画？」

「ああ、京子が映画のチケットを持っていてな。今度一緒に行こうと約束していたのだが、券が四枚あつてな、これでは二枚あまつて

しまつ。それで昼食の礼もかねて、君と木田雅人を誘おうと思つて
だな、その……どうだろう」

最後の方がなにやらごによごによと小さくはなつててけど、言いたいことは解つたのでとりあえず雅人を見ると、手のひらを僕に向けて“お前に任せる”と頷いた。

うーん、じゃあいいかな。映画見るのも久しぶりだし。

「うん、いいよ」

「本当か!」

花が咲くように顔を綻ばせる。

「……」

「どうかしたか?」

「ううん、なんでもない」

貴方の笑顔に見とれてました。なんて、恥ずかしい台詞を言えるほど僕は口がうまくないので首を振る。でもまさか、この笑顔が恐怖で引きつるなんて、この時は予想だにしてなかったな。

『As I hope』

日本語訳は『私が望むままに』というのが今回見る映画のタイトル。タイトルだけだとジャンルが解らないかもしれないけど、一応ホラーである。いつだったかテレビで『超新感覚サスペンスホラー』とか言う触れ込みで流れていた気がする。しかし、いくら思いつかかなかつたからつて『超新感覚』をつける必要はないと思う。適當すぎる。もし本当に『超新感覚』だとしたら、誰もその映画に付いていけないと思うのは、僕だけだろうか。

と、その疑問を暗がりの中にいるはずの三人がたに聞こうと思つたんだけど。

「あれ? 雅人と渋谷さんは?」

「な、なに? ほ、本当だ。ど、どこに行ったんだあの二人は」

最早、どもりまくりである。美倉さんで以外に怖がりなんだな、

まあ、これはこれで可愛いといきましょうか。

「ど、どうした朝倉 湊」

「いや、なんでもないよ。うーん、でもあの二人はもう座っているような気がするし、まあ大丈夫でしょ。もうすぐ、始まるだろうし僕たちもどこか適当に座ろうか」

適当に席を探そうと足を前に出すと、不意に服が引っ張られた気がした。

「美倉さん？」

気のせいではなく、美倉さんが遠慮がちにシャツの裾を握っていた。

「そ、そのだな、あまり前には行って欲しくない。べ、別に恐いとか言っわけではないぞ。そ、そのだな、あまり前に出過ぎれば目が悪くなってしまうからであって、だな」

「うん、そうだね。じゃあもう少し後ろに行こう」

とりあえず、冷静でない美倉さんを喋らせておくと、自爆しかないようなので言っつとおりにしておこう。前に行き過ぎれば目に悪いのは事実だし。

「う、うむ」

兎に角、最後列の端の席を見つけそこに座ることにした。

結論から言っつと美倉さんはゲテモノが駄目なのではないだろうか。タイトルの意味がかなり解らなくなるストーリーというか、おそらく映像にのみ力を注いだ作品だと思う。そのためストーリー事態は最早記憶に残らず、奇妙に原色が使われた奇妙なディテールの妙にリアリティがある怪物しか覚えていない状態で、その変な怪物が出るたびに美倉さんは身体を震わせていた。まあ、かなり気持ち悪かったしねえ。子供が見れば夢に出てくるかもしれないほど不気味かつ精巧に作られていたから余計かもしれない。僕も少しびびっつたし。

でもまあ、ストーリーは希薄だったけど、それなりに迫力があつて面白かったかな、B級だったけど。それなりに胸いっぱいな作品でした。

因みに暗い劇場をでるまで美倉さんが、僕の服の裾を掴んでいたのは無意識かもしれない。

「何？ 用ができた？」

美倉さんはケータイを耳に当てると、眉をひそめ不機嫌な声を露にした。

映画館を出てから、美倉さんが落ち着くまで適当に自販機で買った缶ジュースを飲んで、落ち着き始めた頃に美倉さんのケータイが鳴って、今に至る。因みに相手は渋谷さんのようだ。

「う、うるさい！ ……う、う、う、わかった」

怒ったかのように声を荒げたかと思えば、顔を赤くし、納得したようにため息をついて携帯電話を閉じ、こちらに視線を向けた。

「京子と木田は用が出来たらしい、ので帰るそう」

美倉さんがすべてを言い切る前に、聞き慣れた電子音が遮るように鳴り響いた。

「ちよつと、ごめん」

「ああ」

ケータイを取り出し、ディスプレイに映されたのは木田雅人の文字だった。

「もしもし」

『おー、久しぶりのセリフだ。しかし、声だけってのは寂しいな。まあ、次回あたり大活躍の予定らしいが』

「何言ってるの？」

『ん？ 気にすんな、主人公格の人間にはわからんから』
ますます意味不明だ。

「で、どうしたの？ といつかどこにいるの」

『ああ、悪い。ちと拉致監禁にあつ、ギョビー!』

「ぎゅび?」

『ちよつ、ほんと勘弁してください』んっふっふっふっふ』

「渋谷さん?」

『やつほー、みなくん。悪い、木田の奴調子悪いみたいだから、私が連れて帰るわ。じゃあ、桔梗をよろしく』

「え、あの、切れちゃった」

最後にかすれた雅人の声で、「助けて」って聞こえたのは気のせい……かな?

「どうした?」

「んー、なんか雅人と渋谷さんは帰るって」

「そ、そうか、私と同じ内容だな」

なるほど、何か作威的なものを感じなくはないけど。それに美倉さんなら大丈夫だよな。

「どうする。もう帰るか?」

うーん、真上では太陽が照らしてくる。今日はいい天気だ。洗濯物を干したくもあるけど、せつかくの休日だ。

「このあと、予定とかある?」

「いや、大丈夫だ」

よしそれじゃあ、ゲーセンとかで遊んでみるのもいいかな。美倉さん、そういうの嫌いか……

きゅ〜

これからの思案を予定を組み立ててると。可愛らしい、子犬でも飼ってるんじゃないかって思えるくらいの可愛いお腹の音が聞こえた。

「き、聞こえたか」

顔を真っ赤にしながら、お腹を抑える美倉さん。その仕草もまた可愛いし。

「わ、笑うことはないじゃないか」

別に僕は笑って……頬をに手をあて事実を確認して、頭を下げた。

「ごめん、ごめん別におかしかったわけじゃ……」

「しょうがないじゃないか！ これは飢餓収縮といってだな、胃が空になれば……」

「うーん、生物の授業はいいから、どこかでお昼を食べよう」

「え、あ、い」

このままに美倉さんを暴走させておけば、人体の構成とか喋りだす気がするので、美倉さんの手をとってどこか適当な店に入ることにする。

何故だが、店に入るまで美倉さんは唸っていた。

はむはむというのが似合うような擬音が付きそうな食べ方をする美倉さん。

入ったのはチェーン店のファミレス、休日で昼時なのにあまり混んでいないのは気に掛かるが、他に店がなかったのでここに決めた。味は割と普通だ。まあ、チェーン店としてやっているのだから、不味いということはない、かな。

「なんだ？」

じっと見られていることに気づいたのか、フォークとナイフを持っていて手を止めて訝しげにこちらを見つめてくる。因みに食べているのは鉄板に置かれたハンバーグだ。

「うん、美味しそうに食べるなー、と思って」

「そ、そうか……で、でもな！ 君の作ったハンバーグのほうが美味しかったぞ」

「……え」

そういえばテストが終わって、暇が出来たから久しぶりに晩御飯用と次の日のお昼用に作ったけ。晩御飯はデミグラスソースで、お昼はテリヤキソースで……思い出してみれば、美倉さん美味しそう

に食べてたな。

「じゃあ、今度また作るうか」

「本当か」

目を輝かささんばかりに見開く。

「うん、ソースは何がいい？」

「む、むう」

ナイフとフォークを置いて腕を組んで悩みだす。

はて？ そんなにソースってあったかな、デミグラス、テリヤキ

……あとは大根おろしと醤油、これはさっぱりしていて美味しいんだよねー。

「…………ケチャップ」

「へ？」

ちよっとトリップしてた。ケチャップか、確かにあった。これはこれでシンプルで美味しい。

「うん、わかった」

となると、後でトマトとニンニクはあったから、あとタマネギとひき肉を買わないと。

「楽しみにしているぞ」

「うん」

とりあずお弁当の献立も決まって、改めて昼食を再開する。

日はとつくに傾き、というか、最早沈みかけている。

「ふう、もうこんな時間が」

ベンチに腰を掛け一息つく。

昼食を食べ終えた後、ゲーセンへと向かった。ここで僕の大誤算が起こった。行ったことないかも、と思って入ったら案の定、美倉さんは入ったこと無いらしかった。でまあ、適当にUFOキャッチャーを選択したのが悪かった。そして僕は学んだ。

美倉さんは超絶的に負けず嫌いだということを。しかも、それに

プラスしてどこかで不器用になるという性質を。

五十戦一勝四十一敗九分という結果を出した。引き分けというのは機械の調子が悪くなり、ぬいぐるみが引つかかったまま止まってしまった。係員さんにそれは渡して貰ったのだけれど、美倉さん的にはそれは引き分けという事になるらしい。

で、どうにか取れて、合計十個のぬいぐるみを持って他のゲームで対戦してみたら、またむきになるという始末。で、なんやかんやで六時を過ぎ、一休みという名目で駅の近くにあった、小さい公園で一服することにした。

「いや、すまなかつたな」

美倉さんは座らずに、目の前に立ち、反省しているのか顔を俯かせている。

「うん？ 大丈夫だよ。そもそも誘ったのは僕だし」

でも、かなり疲れているな。久しぶりに騒いだからかな。

「む、そうか……なら、また今度付き合ってもらってもいいか？」

「んー、いいよ、今度はホラー映画はやめようね」

「な、ば、バカ」

ぷいと言う擬音が似合うようにそっぽを向く美倉さん。

なんとなくその行動がおかしくてつい声が漏れてしまった。

「なあ、朝倉湊」

「ん？ なに」

そっぽを向いていたかと思うと、今度はこちらを真剣に僕の目を見ている。

「私は」

沈みかけている日が、彼女の髪、輪郭、全てを際立てるように照らしている。その光景はとても幻想的で、少し違う世界にずれたみたいだ。

ああ、なんて綺麗なんだろう。そう思ったのはいつだったか。

「君が好きだよ」

「え？」

その一言で、あらゆる世界が停止した。

え……いま、なんて……

スキ？ それは……

「だって、みなくんつまらないんだもん」

「うっ」

幻聴だ。でもでも、

つまらないつまらないつまらないつまらないつまらないつまらないつまらないつまらないつまらないつまらない

世界が白黒に染まっていく、視界が歪んで保てなくなる。地面が揺らぎ、足に力が入らなくなる。

「おい、大丈夫か、朝倉湊！」

透き通るような声が耳朶を打つ。その声で意識が、世界がクリアになって足に力が戻る。

「え、あ、大丈夫だよ」

「そうか、よかった」

安心したように息を吐く。

「なあ、朝倉湊」

「うん？」

「答えを……もらえないか」

どくん、と胸を裂くように心臓が大きく鐘を鳴らした。またあれが頭に、いやだ、いやだ、いやだ、いやだ。

もう、あんなことを思い出さたくない……だから、僕は、

「それは勘違いだよ」

全力を持って引き離せる言葉を吐いた。

こんな事もあったんだ。

ただ、答えが欲しかった。

断られてもよかった。

そういうものだと思っていたから。

どんな答えでも耐えようと思った。でも、耐えられないと思ったけれど、もし私が泣いてしまえば、君が困ってしまうと解っているから、努力はしようと思った。

なのに、君は答えすらくれず、拒絶し、間違いだと告げた。

なあ、私の想いは間違っていたのか？

今日の為に君を誘った。

教室で四枚のチケットを睨んでいると、京子が呆れたような声を出す。

「あのねー、そろそろ渡したら？ テスト始まっちゃうよー？」

「う、うるさい、解っている」

機を逸してしまうと思いつつも、行動に入れず、誘えたのはテスト後だった。

今日の為に服を選んだ。

「な、なあ。この格好で大丈夫か？」

「うん、可愛いって。惚れちゃうかも」

「ば、バカ」

京子は私の問いかけに楽しそうに。親指を立てて応える。

「やっぱ、アンタはスカートのほうが似合っわね、なのにどーしてズボンばかり穿くかね」

「いいじゃないか、そっちの方が動きやすいんだから」

「たまには機能重視でなく、こういうのも着なさいっての」

「私の自由だろう」

「んー、でも、男の子の大半って清楚な子に弱いつて言うし、みんなくもそうかも」

「そ、そうなのか」

「んっふー、顔を赤くしてー」

「う、うるさい」

そうなのか、と思いつつ、結局スカートを選んだ。

今日の為に普段見ないホラー映画も我慢した。

「ちよ、ちよっと来い」

「何よー、みなくんたち待ってるよ？」

映画館のドアの前で、二人が不思議そうに見ているのが視界に入ったが、こちらとしてはそれどころではない、申し訳ないが少し待て。

心の中で謝りながら、京子に目を向ける。

「何故、ホラーなんだ。知っているだろう、私がこの手の映画が嫌いなのを」

「ふっふっふー、もちろん」

口に手をあて、含み笑いをする京子。

「わざとかー！」

「さつてねー。でも、まさか自分から誘っておいて入れないなんて言わないわよねー」

「ぐっ」

そんなことを言えば、朝倉湊に嫌われてしまいかもしれない。

「それに、桔梗みたいな女の子が恐がるっていうのはギャップがあつていいかもよ」

「……」

「おっやー、何を黙っちゃってるのかなー」

「う、うるさい」

結局我慢することにした。

今日の為に普段行かないゲームセンターなるものの建物に入った。

「だいじょうぶ？ 美倉さん」

心配するように振り向く朝倉湊、私はそれに頭を左右に振って答える。

「大丈夫だ、人ごみが余り好きじゃないだけだ」

「ふむ、じゃああれはどうか？」

少し思案してから、彼が指したのは外にあった箱だった。

「おお」

その箱にはぬいぐるみがたくさん入っていた。……ほしいぞ。

「UFOキャッチャーって言うんだ、あの上にあるのを操って取るんだよ……って、やってみる？」

「いいのか！」

「もちろん」

君は笑顔で頷いてくれた。

なのに、君は答えすらくれなかった。

「勘違い……だというのか」

「うん、美倉さんは、ただ僕に人気があったから、ファンクラブがあったから、そう思ったんだよ」

一切の感情もない、肯定の頷き。それは次の言葉すら紡がせてはくれなかった。

「そ、うか」

涙が零れそうだった。見られなくなかった。だから、彼の前から消えたかったから、走った。

何も視界に入れず、走った。自分がどこへ走っているかもわからず、ただ走り続けた。

足を止めたのは携帯電話の電子音だった。

「もしもし」

『やつほー、どうだった？』

京子の声だ。それだけで安心できて、また涙があふれた。

「なあ、京子、私は勘違いをしていたのかなあ？」

『ちよっ、あんた泣いてる？ 今どこにいるの？』

ああ、君は本当に優しいな。

素晴らしい友人を持って私は、幸せだ。だからこそ、君が協力してくれたのだ。きちんと決着をつけてやる。

こんな事もある。(前書き)

大変遅れて申し訳ありませんでした。

こんな事もある。

空には暗い蓋が覆いかぶさって、太陽を隠している。

「うん、天気が激烈に悪い」

因みに僕の心も最悪だ。因みに寝ていないおかげで体調も悪し。

まあ、僕が悪いんだから仕方ないかな。

「はあ、学校に行きたくない」

自業自得、そんなものが頭に浮かび上がる。

あー、だめだ。すっげえむしゃくしゃする。

あの女の子の泣きそうな顔が自分を支配するから。

「あー、もう」

振り払うように傘を取って、いつもより三十分早く学校に行くことにした。

教室のドアを開けると、電気すらついていなかった。

「誰もいない」

当然か。

とりあえず、窓際から三列目の一番前所謂教卓の前という、勉強好き以外はそれなりに躊躇させられる所にかばんを置くこと、

「やめた」

踵を返して教室を出ることにした。多分ここにいたら、彼女に会ってしまふ。そう思うと逃げ出したくなる。ので実行することにした。

人は今の時間あまり、いないし屋上に行っても大丈夫だよな。

ちらほらと何人かクラスメイトを見つけたが、たぶん大丈夫。

「降りそうだなあ」

雅人から貰った合鍵で開いたドアから見えた鉛色の雲は、今にも泣き出してしまいそうだ。

今日はここでサボろうかと思ってるんだけどな。雨の中、ずっと外にいたらアホだよな。

天気予報じゃ、降水確率四十%だったしなあ。微妙な数字だけど、この状況じゃあ確実だ。

「ま、いいか……」

なあんか、眠くなってきた。寝てしまおうか、しかし寝ている間に雨が降ってきたら、どうしよう……

意識とは相反して、体は眠りたがるように力が抜けて地面に伏すのだけがわかった。

「お、つきろー」

ずがん！

「いつ」

蹴られた？ 何故に？ ホワイ？

状況は飲み込めず、ただ頭を蹴られたというのが、痛覚を持って教えてくれる。頭を抱え空が視界にはいると、それほど時間は立っていないのか相変わらず曇っていた。

「渋谷さん？」

頭を抑えつつ、完全に目を覚ました視覚が捉えたのは、今もつとも会いたくない女の子の友人が目の前に立っていた。

「なあに、呑気に寝てくれてるのかな？ 君は」
怖い。

頭を茶に染め百八十センチに近い細身の女子から、発せられる殺気に体は震える。

純粹に怒っている。それも当然だ。僕は彼女の親友を傷つけたのだ。

「本当はあの子が振られても、あたしは出てくる気はなかったんだ。

けどね」

一人ごちるように、頭をかきながら呟く。

「恋愛は確率で計れるものじゃない、当然二分の一だなんて決まってる。みなくんがあの子を単純に振ったんだってんなら出る気なんてなかった」

今度ははつきりと聞き取れた。

「じゃあ、なんで……」

ここにいるのか、とは続けられなかった。いや、こちらを睨む渋谷さんが止めた、というのが正しいかもしれない。

「なんで？ 本気でそんなことを思ってるの？ なら本当に救いようがなさ過ぎる！」

語尾は怒りで震え、石のように握り締めた拳で僕の顔面をぶん殴る。痛くて泣きそうだった。けど、

「ふざけるな！ あんたに何があったのかなんて、どうでもよすぎる。」

あの子を振って傷つけたなら、それは別に構わなかった。でもね、答えすら与えられずに勘違いだなんて言われてどうしろって言うのよ。真剣に恋愛してんだ。だったら、しっかり答える！」

吐き捨てるように、投げつけるように出した言葉。痛みで泣きそうだったのをその言葉がとめた。

「それに、君は何で一緒にお昼を食べた？ なんで、休みの日に遊びに行っただ？ あんなことがあったのに、つまらないって言われたのに」

その一言で、頬に残る熱すら忘れて、停止した。

「な、んで？ 知ってるの」

ありえない、そんなことを知っているなん……

「俺だよ」

「ま、雅人？」

息を切らし、飛び出したのは僕の友人である木田雅人だった。そして、当事者を抜いて、唯一あのことを知っている親友だ。

喋らないと、信じてたのに、だから話したのに、誰にも知られ
てなかったのに。

「なんで言ったんだよ？ 雅人」

「お前、俺に対してなんて言った？」

「え？」

返ってきたのは答えではなく、質問だった。

「なに？」

「お前、俺にこういったよな 美倉なら大丈夫だ、って。それは
どういう意味で言ったんだよ、お前は」

「それは」

どういう意味で言ったんだろう？ 美倉さんが僕にそういつたこ
とをしないと思っていたから？ ……それは、

「朝倉湊オツ！」

思考はどこからともなく届いた自分を呼ぶ声に中断された。

この声は、

「なにやる気かね、あの子は」

「マジで、どうする気だよ」

呆れたように呟く渋谷さんと、雅人が見る視線の先には、

「……美倉さん」

が、校庭に、僕……校舎と向かい合うように立っていた。

怒りに身を任せるときもある。

「さて、どうすんの？」

「うむ、どうするか……そうだな、まず彼に聞くことにしよう」

今にも破裂しそうな重い雲を天上に置いて、京子と二人並んで通学路を歩きながら、これからのことを相談している。

「彼って？」

「木田だよ。朝倉湊の小学校来の友人なのだろう？　なら彼に聞くが手っ取り早い」

丁度、前方右斜めにいる男子生徒を指差す。

「待て、木田」

「んあ、つてみくらあ！？」

あくび一つをしながら振り向いたかと思えば、突然大声をあげた。私は何か彼を驚かせることをしただろうか？

「なあに、驚いてんのよ、木田あ。学年一の美女が話しかけてるのに」

私の背後から、何故か凄んだような声を木田に掛ける。京子は何を怒っているんだ？

「いや、その、驚いてすいませんでした」

木田は木田で謝るし。

「よろしい」

京子は京子で腕を組んで偉そうに頷くし……なんか頭痛がしてきた。

「それより、朝倉湊について聞きたいことがある」

「やっぱり、か」

私の言葉に右手で頭を抑え、ため息をつく木田。

「お前、湊に告白して、勘違いって言われたんだろ？」

「な、何故それを」

知っているのか、と言葉を続ける前に木田が遮るように口を開く。「そうか、昨日電話して湊から少し聞いたけど、やっぱりまだ無理だったのか」

「ど、ういうことだ。無理とは」

「あー」

失言したとも言うように、口を手で抑え、一考するように黙った。

「まあ、いいかな、美倉には聞かせても」

何か物言いが気になるが、あえて突っ込むのはよしておこう。

「で、まあ話すのは、学校についてからだ。さすがにここは人目がつきすぎる」

「む」

学校の校門を通りそのまま校舎には入らずに、人に見つかり難いところ、体育館裏と言つ実にありきたりなところへ足を運んだ。

「で、なんなのだ。ここまで来るとはそれほど聞かれたくないことなのか？」

「まあな」

木田は体育館の壁に背を預けると、苦笑を浮かべた。

「んじゃま、話しますか」

朝倉湊は中学の頃に告白をされたらしい。朝倉湊も、その娘を気に掛けていたらしく両想いだったとのこと……聞いてて腹立たしくなるのは何故だろう。

「こほん、話がそれたな。」

で、そのまま付き合つことになったが、物の一ヶ月で別れてしまつたらしい、理由は、

「その彼女曰く、湊はつまらなかつたらしいんだ」

とてもひどいものだった。自分で告白して自身の想像に合わない、それだけならまだいい、人間なのだ全てを知ることなんてできないのだから。けど、つまらないなんて言われたら、言われた人間はどうすればいいのか。

確かにそれはひどい。けれど、

「で、それ以来女子と付き合うことはなくなっただよ」

侮辱された。私がそのような女だと思われた。ひどい侮辱だ。

ぶち

『ぶちっ？』

京子のと木田の声が重なるがそんなことはどうでもいい。私はただむかついた。怒っているのだ。

「京子、朝倉湊を探してくれ」

「は？」

「見つけたら校庭のほうを見るように頼む……そうだな二十分以内だ。いいな」

「え、ちよっ」

京子の答えを聞く前に私は走り出す。心を落ち着かせるために、これからやることに対して。

まったく、このような答えしか浮かばないようでは、私もまだまだなのだろうな。だが、これくらいのことをしなくは君は信じてはくれんのだろうか？

なあ、朝倉湊

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4739a/>

天才少女は恋をする。

2010年10月10日19時14分発行